ピース・ウイング長崎 会報

# へいわらじ

108号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町7番8号 ■電話（095）844-9922　FAX（095）814-0056
http://www.peace-wing-n.or.jp

■秋月先生追悼
■市民のつどい開催
■長崎市少年平和と友情の翼
■秋月辰一郎先生お別れの会が開催されました
■なかにし礼 講演会を開催
■最近のニュースから
■平和案内人二期生講座修了
■情報コーナーメッセージ
■祈念館だより
■「アジア青年平和交流事業」報告会
■慰霊碑めぐりを開催
■「長崎ピースラリー2005」から

# 秋月先生追悼

秋月先生が亡くなられて、はや2か月を迎えようとしています。

戦後50年あまり、一貫して被爆地における医療に携わり、被爆医師として被爆者の大きな心の支えとなり続けてくださった秋月先生。

今号では、「小異はそのままに、大同で集まろう」と、先生の提唱に共鳴して同じ志で市民運動「ながさき平和大集会」を立ち上げられ、本協会の事業にも積極的にご協力をいただいた、長崎県地域婦人団体連絡協議会の前会長の小池スイさん。

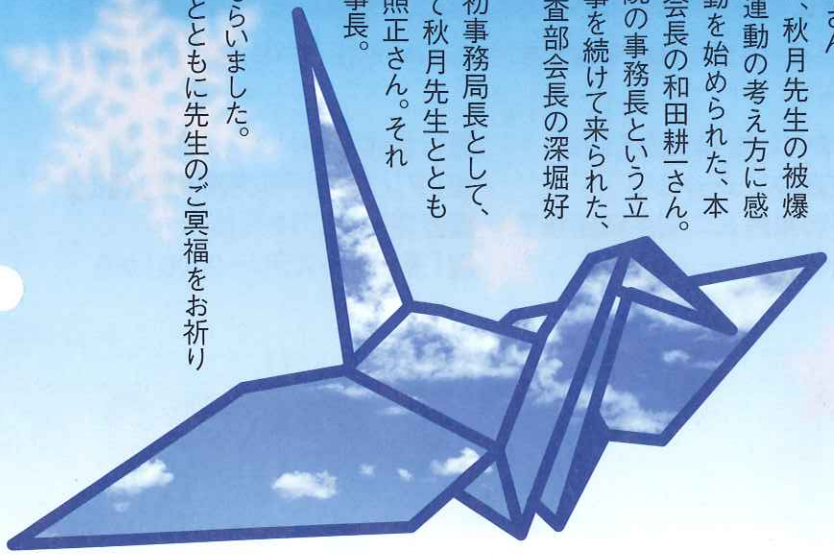
本協会発足時に、秋月先生の被爆医師としての平和運動の考え方に感銘を受け、継承活動を始められた、本協会継承部会前部会長の和田耕一さん。

長年、医長と病院の事務長という立場で先生に接し仕事を続けて来られた、本協会写真資料調査部会長の深堀好敏さん。

本協会の発足当初事務局長として、財団法人化へ向けて秋月先生とともに奔走された松永照正さん。それに本協会の横瀬理事長。

この5人の方々に秋月先生への哀悼の言葉を寄せてもらいました。

あらためて、皆様とともに先生のご冥福をお祈りしたいと思います。



## 長崎の心を一つに

(財)長崎平和推進協会 理事長
横瀬 昭幸さん

秋月辰一郎先生が永眠されてから早幾月日が過ぎ去りました。平和を求めて活動している私たち長崎市民にとって、平和運動の理論的支柱として人々から信頼され、存在感を示された偉大な人に去られたとの思いが日ごとに募ってきます。

特に私ども長崎平和推進協会にとっては、設立に向けて奔走していただいた方であり、病床に臥されるまで初代理事長として長年にわたりご尽力いただき、協会発展の基礎を築かれた、掛けがえのない方でした。

当協会が設立された1983年は、世界は東西冷戦の中、欧州では米ソの中距離核兵器が対峙し、世界の核兵器は7万発にも及ぼうとするなど、正に核軍拡競争の真っ只中にありました。それらに対する危機感から一方では、反核運動が世界規模での大きなうねりとなっていたものの、唯一の被爆国日本では原水爆禁止運動が分裂し、一般の市民や被爆者は自ずと反核運動から一定の距離を置いていた時代でした。

そのような中にあって、市民と行政が一体となり、核兵器の廃絶を主眼とする平和推進運動を行おうという趣旨で生まれたのが当協会でした。いろんな立場の人達が、国境を越え、人種を越え、考え方の相違を越えて核兵器廃絶と世界恒久平和の実現という共通の目標に向かって手を取り合おうというものです。

中でも、先生が提唱され1989年にはじめられた「長崎平和大集会」は、被爆者を含む多くの市民が参加して開かれ、今年で17回目を迎えました。「小異は捨てるのではなく、残したままでよいから『核兵器の廃絶』という共通の目標に向かって大同につこう」という先生の呼びかけで実現しました。正に市民による平和運動のあるべき姿を示していただきました。

先生は、長崎に原子爆弾が投下された時、爆心地から1・4キロの浦上第一病院において自らも被爆されながら、医師として救護に当たられた当時の苦しい体験と、原爆への強い憤りの気持ちを、後に「死の同心円」という書物に著されています。その最終章の中に次のような一節があります。

「これから何年たっても、私は命あるかぎり、八月の空を見るたびに、

もの狂おしくなる自分の心をどうすることもできないだろう。…ヒロシマとナガサキの事実が、忘れられてゆくのを悲しみ、いきどおって、私の心はふるえる。」

この言葉に込められた思いの中には、忘れられつつある1945年8月9日の長崎の惨状や、その後の多くの被爆者の苦しみなどの悲惨な被害の実相を広く世界に訴えていかなければならない。核兵器による惨禍はけっして繰り返されてはならないとの強い信念があったと思います。

被爆から60年を経た今もなお、世界には人類を絶滅させるに余りある核兵器が存在しています。今こそ、核兵器のない平和な世界の一日も早い実現をめざして、私たちは長崎の心を一つにして取り組まなければならないとの思いを新たにしています。そのことこそ、秋月先生のご遺志に報いることではないでしょうか。

## さようなら 秋月辰一郎先生

写真資料調査部会長
深堀好敏さん

初めて秋月先生に出会ったのは1953年早春だった。前年の秋、私が入職した聖フランシスコ病院の医師が移民団と一緒に南米ボリビアへ渡ることになり、その後任として北高・湯江から秋月先生が戻ってこられた。

先生は1945・8・9当時この病院の前身「大東亜布教財団 浦上第一病院」の院長であった。病院は本原の丘に建つ赤煉瓦造りの建物で神学校の教室を病室に改造した急ごしらえの結核療養所だった。

8・9原爆は、爆心地から北東へ1・4キロメートル離れた浦上第一病院を容赦なく急襲した。病室の窓ガラスは吹き飛ばされ、やがて炎上した。先生は想像を絶するこのときの体験を1966・8「長崎原爆記」に記し、さらに1972「死の同心円」が発刊されナガサキ原爆の実相を世に知らせた。

先生は日頃から永井博士亡きあとのナガサキ原爆の行く末を誰よりも心配しておられた。そして、1969年長崎総科大助教授鎌田定夫さんが提唱した被爆証言運動に共鳴、その先頭に立って被爆者の生の声を精力的に発信するようになった。

やがて10年に亘る長崎の証言集を刊行した頃から先生は、労働組合・被爆者団体・個人の草の根活動などバラバラに行う平和運動に疑念を感じ、「核兵器廃絶」ただ一点を目標に大同団結できないものかと、神経を注いで関係者を廻った。先生の頭の中にはナガサキの平和運動を一般市民とりわけ婦人や学生をはじめ、財界や行政、官庁が一緒になって参加できる組織にしたいとの願望があった。

先生の悲願は1983年2月長崎平和推進協会創立という形で実り、長崎市長を会長とする初代理事長に就任された。しかし、1992年10月14日この日張り切って出掛けて行った長崎市医師会館における核戦争防止国際医師会議（IPPNW）のあと倒れ、以後13年間意識が回復しないまま入院生活を余儀なくされた。

先生が病床にある間も国連を中心とする核廃絶の道筋は遅々として進まず、今年5月ニューヨークで開かれた核不拡散条約再検討会議に至っては何ら進展もなく、各国の不信と怠惰は被爆地に憤りと虚無感だけを残して閉幕する有様であった。

先生は日頃から大国のエゴは核兵器削減作業を困難にするだろう。だから被爆者は不断の声を上げなければいけないと話しておられた。核爆発によって放出された放射線の影響で、毎日毎日次々に死んでいった被爆患者の怨念を先生は一身に背負って生きてきたように思われる。持病の喘息を抱えながらからだに鞭打って反核平和を訴えつづけてこられた先生にとって、諸悪の根源は核兵器にあった。

1966・8被爆医師の証言として「長崎原爆記」が刷り上ったとき先生から渡された本の添文に次の歌があった。

うらかみの被爆の丘の20年を
ただひたすらにいのちおもいぬ

先生の平和行脚はこの頃から始まった。

2005年10月20日朝、8・9直後の浦上第一病院の惨状と1人の青年医師（秋月先生）を描いたアニメ映画「NAGASAKI・1945

～アンゼラスの鐘～」の完成を見届けるかのように、すが子夫人が見守る中先生は静かに昇天された。享年89才。かつてあの日まだ神学生であった司祭は通夜の式で遺族と参列者に向かって「哲学者のような人でしたね…」と惜別の辞を贈った。

先生が長崎の宝だと言っていた鎌田さんを先に失い、いままた先生ご自身に永遠の別れを告げなければならない現実は、まことに無情といおうかあとに残された者の責務は大きい。願わくば安らかに憩われんことを。

## 秋月先生を偲んで

県地域婦人団体連絡協議会前会長
小池スイさん

先生のご訃報を聞き、ああこれで私達と先生の平和運動は終ったなあと思いました。

長い闘病生活で奥様始め病院の先生方のご苦労とお心痛を思いお慰めの言葉もありません。私と秋月先生とは平和運動を通してのお仲間でした。

私が平和運動にかかわりを持つようになったのは、昭和31年原水爆禁止世界大会が長崎で開催された時からです。

大会の目的は、世界中から核兵器をなくそう。被爆者を援護しよう等で国民運動として始まったものでした。すべての政党が中心になって団体等がそれに参加する形でした。

しかし、その2・3年後からお互いの思想・信条の違いから分裂して行きました。特に中央の対立がひどく、地方はそれに振り廻される形で分裂していきました。

私達婦人会は騒々しい対立の中でも子供を生み育てる母親の運動に参加せねば平和は守れないという前会長の強い意志の元で頑張って来たのです。

秋月先生とお会いする様になったのはその様な時からでした。先生は中央の運動にまきこまれない地方だけの集会を持とうと私共に話をもちこまれたのです。

「小異を残して大同で集まろう」、先生の持論でした。意見の一致をみた点から実行しよう。長崎の一般の市民に呼びかけ、市民が気軽に参加出来る様な平和集会を開くという事で話がまとまりました。まとまると同時に私どもは、親子が手をつないで参加出来るというスローガンをかかげて、チラシを配ったり電話したりして広く市民に呼びかけをはじめたのです。

そのようにして平成元年7月8日、長崎市民による第一回「ながさき平和大集会」が、長崎市平和会館に六百人余の賛同者のもと開催されることになりました。秋月先生が呼びかけ人だからこそ出来た集会でした。

あれから二十年近く、市民による運動は少しずつ形を変えながらも若者たちに引き継がれて開催されております。先生ご安心下さい。

私も世界の平和がおとずれるのを祈って止みません。

どうぞ安らかにおねむりください。

## 「先生はいつも身近に」

継承部会前部会長
和田耕一さん

聖フランシスコ病院の秋月辰一郎先生のお名前はかねてより存じていたが、先生との初対面は、1984年のある日、隣家の友人との世間話の中で被爆体験が話題にのぼったおりであった。友人から今度、市と民間の人達で、長崎平和推進協会という団体が原爆資料館内に設立されたが、被爆者なら入会し体験談を話しませんかという誘いだった。

これまで子ども達が通学していた小、中学校で請われるままに私の被爆体験を幾度か話したことはあった。

協会設立の中心が秋月先生なので一度お話しを伺ったらいかがですかと話してくれた。数日後思い切ってお電話をしたところ幸い在院されていた先生から日時の指定を受けて、お約束の日、病院を訪ねたところ、今診察中なのでしばらく待ってほしいとの伝言だった。間もなく先生がみえられ、「僕の部屋へおいで」とのことで恐る恐る居室へ案内されたが、笑顔での応対にはこちらの方がどぎまぎしたのを憶えている。「楽にしなさい」の声で少し緊張も解けたせいか、それから約2時間近く、「君の被爆体験と平和に対する考えを話してごらん」と言われた。先生には時々質問を交えて、静かに聞いて戴いたが、その時の様子が今でも強く印象に残っている。

協会には僕が電話しておくからとのことで事務局を訪ね入会の運びとなったのでした。

入会後も諸々の会合でお会いし、親しくお話も聞かせてもらい、たいてい病院にいるから用があったら遠慮なくおいでの嬉しい言葉も戴いた。ご自宅には2度程、病院には厚かましく幾度お訪ねしたことだろう。先

生の空時間と思われたが、いつも心安い応対に甘え、質問も重ねたが、時にはご自分の歩まれた道のお話も伺った。分かりやすく、明るい笑顔でのお話には頭の下がる思いがした。

年賀、暑中のお便りも戴いたが現存している2枚には先生の心情が示されてもいた。1986年1月新年の御挨拶に病院へ伺った折だったが、君は僕の「死の同心円」は読んだね。の問いに未購入と申しあげたところ、早速書架より1冊を取りだされ、自ら署名された著書を戴いた時は大きなよろこびだった。それは今も机上にあるがアンダーラインの数知れず、語りに行き詰まった時、頁を開くと先生の励ましの声が聞こえてくる。

いつだったか次の様なお話があった。「いつもね、夏になると又原爆

かと言う人もいるが、被爆の実相はまだ充分に解明されていないのだよ。広島・長崎の被爆者はもっと声を大にして世界に訴えなければ原爆の実態は忘れ去られるだろう」と。医学的なお話もあったが門外漢の私にはむずかしいのでよく憶えていないが、前文はメモしていたので心の底に残っている。又お便りの中には淋しい言葉もあった。「世界も変り、日本も変った。自分自身も過去と現在のはざまで迷っています。今後はいろいろな会に出ることを少なくしようと思っている」と。顧みると時には厳しい態度も見受けたが、お会いする度に「やあ元気に頑張ってるね」の笑顔がそこにあった。

そうだ、先生はずっと私の身近におられるのだ。

## 「秋月辰一郎先生を偲んで」

元事務局長
松永照正さん

「先生、そば食べに行きましょうか」「おー」。これは秋月先生の機嫌のいい時のご返事である。思えば、あの年の夏から秋にかけて先生とは何回も昼食を共にした。ご自宅で、又、外で。倒れられるなどとは…。

先生とは深いご縁を頂いていたのだろう。昭和57年から約10年間、長崎平和推進協会で、又長崎市民平和大集会で先生と絶えずお会いし、お世話になり、又、いろいろと教えて頂いた。その間先生の核兵器廃絶への強い意志と情熱をしみじみ感じた。

長崎平和推進協会の設立は容易ではなかった。秋月先生、小池スイさんのご提案を受け、当時の本島等市長が市議会と協議したが、何しろ官民合体の平和推進組織とは正に希有なことなので、連日真剣な論議が行われ、時には深夜に及んだ。最終的には市長と市議会の努力で設立が認められたが、設立の理念を確立し、方向性と継続性を維持するために早急な財団法人化が議会から求められたのである。当時私は市教委から出向いてきたばかりであったが、いきなり協会財団法人化の特命の事務局次長を仰せつかった。正に寝耳に水で目を白黒させてもがいた。

市ではどうにもできず、県に助力を頼んだが県も同様であった。

秋月理事長とは常に連絡をとっていたが、先生もどうしていいか分からず途方に暮れた。その後国と直接に接渉し、設立の趣旨、理念を了解してもらい、年間の継続事業と軍縮週間の大事業を策定し、又、財源確保に奔走した。

こうした協会の生い立ちの背景は先生に相当なプレッシャーであったろう。先生は協会を軌道に乗せるために全力をあげられた。

今、ハウステンボスが建設されているが、当時は原野のように荒地になっていた針尾島に「この子を残して」の浦上天主堂周辺のセットがつくられ、市民に呼びかけ現地ロケ見学の最初の事業から、協会が行うすべての事業に出席し、部会活動を支え、ほとんど毎日事務局に顔を出された。更に先生自ら財源確保のために企業を訪ね、しぶる相手に頭を下げ、私たちの前で荒波をかぶられた。そのような理事長の熱意に、私たちも負けまいと燃えた。

「考え方や経済的立場が違っていても、それにこだわっていては前進はない。違いは置いて核兵器廃絶のアピールで力を合わせよう」。

先生は言葉だけでなく実行された。どんなに小さな会合でも出席して真剣に理念を説かれた。私は心を強く打たれた。せい惨な被爆の中で医師として人の命を見つめ、人間愛の涙の中で培われた先生の核兵器廃絶の理念を私たちはぜひ受けついでいかなければと思う。

国連軍縮週間行事　10月24日～10月30日

# 市民のつどい開催

**今年も、10月29日（土）、県地域婦人団体連絡協議会や活水高校平和クラブ、本協会の各部会員の協力を得て、国連軍縮週間「市民のつどい」を開催しました。**

**前日からの雨模様が早朝まで続き、関係者としては気を揉むことになりましたが、8時半、関係者が集合する頃には薄日が射しはじめ、開設の10時頃には秋晴れを感じさせる好天気となり、おおぜいの市民で賑わいました。**

## 「綿菓子コーナー」

今年のチャリティー綿菓子コーナーは例年になく大盛況でした。市民大行進が終わり原爆落下中心地からたくさんの子供達が広場に上ってくると、たちまち長蛇の列が。綿菓子まみれになりながら作っていると、割り箸を手渡す手伝いをしてくれたり、綿菓子が出来上がる様子を一生懸命見ている子供達がとても可愛らしく、少しでしたが楽しく会話をすることができました。綿菓子を作ることで精一杯で、チャリティーの意味や、平和であるからこそおいしい綿菓子を食べることができること、ひとりひとりの気持ちが平和を作っていくということをしっかり教えることができなかったのが心残りですが、このように色々な人達と触れ合いながら、成長するに従って平和の大切さを学んでいってほしいと思います。

## 折り鶴コーナー

折り鶴コーナーでは、当協会の国際交流部会員と継承部会員の約15名が、集まった市民の皆さん方や外国人の方とともに平和への願いを込め、折り鶴を折りました。

外国人の中には、折り鶴を折るのは初めてという方もおり、国際交流部会員が日頃鍛えた語学力を活かして、手取り足取り折り方を伝授していました。

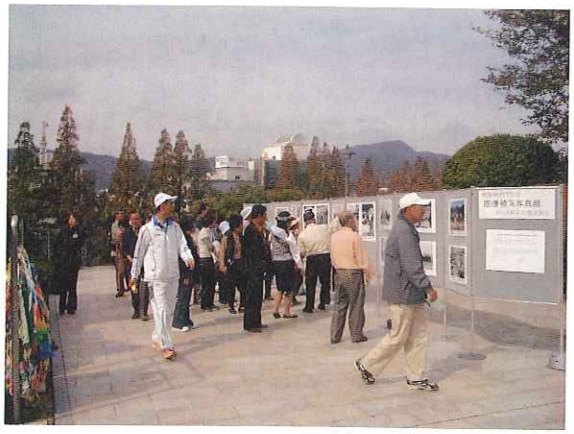
また、親子連れのご家族にも多数立ち寄っていただき、折り鶴を通じて平和への思いが親から子供の世代へと受け継がれていくことを願うばかりでした。

できあがった折り鶴は、ご協力いただいた皆さん方の気持ちを一つにするため糸でつなげて千羽鶴にして、平和のメッセージを添え、後日核保有国の首脳に送り届けることにしています。

## 被爆写真パネル展

昨年に引き続き、開催する今回の被爆写真パネル展は、前回の好評に応じたもので、昨年の片面のみの展示を、パネルを通路中央に配置することによって、パネル両面の展示とし、昨年の倍の展示スペースを確保することが可能となりました。写真資料部会員一同張り切って、写真の選定に当たるとともに、当日は説明要員として、昨年以上に多くの部会員が参加しました。

今年は、被爆60周年の節目の年でもあり、市民大行進の参加者が例年以上に多く、その流れで、大勢の市民の方々が「市民のつどい」会場に



も足を運ばれ、会場入口に展示している写真パネルに足を停めて熱心に見入っている姿が見受けられました。

また、原爆資料館に向かう修学旅行生や観光客の方々も多く、説明要員として配置している部会員が熱心に身振り手振りを交えながら説明している姿に、苦労して選定した被爆写真を通して、微力ながらも、市民の方々や観光客の方々に、核兵器廃絶を訴えることでがきたという充実感を感じた1日でした。

## 紙風船コーナー

「市民のつどい」開催の翌日、熊本県南阿蘇村から、一通のＦＡＸが届きました。

おそらく「市民のつどい」の紙風船コーナーで、放たれたであろう風船が、なんと秋風に乗って遠く阿蘇山の麓まで届いたのです。

このたび、わざわざＦＡＸを届けてくださったのは、南阿蘇村にお住まいのご婦人の方で、協会名のロゴしか記入されていない風船を見た子どもさんが、インターネットで探しあててくださったそうです。

お電話で、「市民のつどい」の催しの経過とともに、当協会の概要をご説明して、後日パンフレットと記念品をお送りしました。

熊本はもちろん、大分や福岡など他県から多くの小学生が修学旅行に来崎し、当協会の継承部会員から被爆体験を聞いて、協会や長崎のことを知ってくれる人はたくさんいます。しかし、「環境に優しい紙風船」が遠く他県まで届き、このような形でお便りをいただいたのは初めてのことです。

南阿蘇村のＴさん、どうもありがとうございました。

## 戦時食コーナー

今年も市民大行進が終わる午前11時頃までに準備を終え、多くの方々に戦時食を試食してもらおうと、長崎県地域婦人団体連絡協議会と活水高校平和クラブの皆さんに、当日の朝8時半には会場に集まってもらい準備にはいりました。前日から県地婦連の皆さんに用意していただいただんご汁約５００食に加えて、芋だんご、ヨモギのてんぷらなど10数種類の戦時食も調理していただきました。

来場者の中にはテーブルに並べられた戦時食を眺め、「これは久しぶりに食べるよ」と戦争当時の思い出話をしたり、戦争を体験したことのない人や学生さんは「これ何ですか、食べた事ないです」、「これ味がないですね。当時は大変だったでしょうね」など感想を話していました。この戦時食をとおして多くの方々に、あらためて「平和」と「戦争」について考えてもらえたのではないかと思います。

# 長崎市少年平和と友情の翼

長崎平和推進協会　末次哲朗

**本年で10回目を迎える「少年平和と友情の翼」事業は、昨年まで長崎市内に住む小学5・6年生と中学生を対象にしていましたが、今年は長崎県内の小学5・6年生と中学生に枠を広げ、男女それぞれ35名、合計70名の小中学生が参加しました。子どもたちは那覇市内の小中学生と沖縄県内の戦跡巡りや研修・交流活動を通じて相互の友情を育み平和の尊さを学ぶことができたようです。**

本年度も7月16日(土)～7月17日(日)2日間に日吉青年の家に宿泊しての事前研修。7月25日(月)～7月28日(木)の4日間にわたり沖縄研修が行われました。事前研修では、原爆資料館や城山小平和祈念館の見学や平和公園周辺の碑めぐりを平和案内人1期生の皆さんの協力を得て実施。那覇市の市民平和交流室から職員を招いての沖縄の歴史や文化、そして太平洋戦争末期の地上戦の様子などの講話をしていただきました。県内全域から集まった初対面の子どもたちは、最初は戸惑いながらも次第にうちとけ、事前研修が終わる頃にはたくさんの友達をつくることができたようです。

## ひめゆり学徒生存者の話をきく

沖縄研修は、7月25日の原爆資料館ホールでの出発式からはじまりました。最初に多以良光善団長（長崎原爆資料館長）による挨拶のあと、団員全員による出発のエールを行い、沖縄に向けて出発しました。

研修1日目は、昨年8月に開館した対馬丸記念館で同世代の子どもたちが集団疎開で、つらい経験をしたことを学び、対馬丸の慰霊碑である小桜の塔で黙祷を捧げました。その後、沖縄の歴史を学ぶために首里城公園を訪問しました。その夜は、ひめゆり学徒生存者の講話を伺いました。戦争中、常に生死のはざまに立たされていた学徒隊の話や壕の中の様子を聞いて、沖縄の悲惨さから、子どもたちも「戦争と平和」について改めて考えていたようです。

## 沖縄の子どもたちとも交流

研修2日目は、那覇市内の小中学校生と一緒に沖縄の戦跡巡りを行いました。今年は那覇市内の城北中学校と大名小学校の生徒さんに参加していただきました。目的地に移動するバスの中では、長崎と那覇の子どもたちができるだけ早く友達になれるように、互いに隣り合わせに座るようにして、和気藹々とゲームをして楽しみました。この日は、糸数の壕、平和祈念資料館、平和の礎、ひめゆり資料館を見学しました。戦跡巡りのあとは、宿泊先の都ホテルに戻って那覇の子どもたちが一緒になって平和について考えました。食事会では、那覇市の子どもたちによるエーサーの演舞をはじめとする催しが行われ、長崎からも「長崎ぶらぶら踊り」を披露しました。長崎と那覇の子どもたちとの交流は、この1日だけでしたが、手紙やメールの交換をつづけて、今後も平和を考える仲間として友情を大切にしてほしいと思います。

## 自然や文化も学ぶ

研修3日目は、「沖縄の自然」を学んでもらいました。沖縄美ら海水族館で沖縄地方にしか生息しない魚や大型水槽の美しい魚などを見た後、珊瑚礁の海を実際に見学するために、いんぶビーチのグラスボートに乗船しました。午後からは、恩納村のムーンビーチで海水浴を楽しみ、沖縄の海の色と水の感触を楽しみました。

最終日は、「琉球村」と「公設市場」を見学しました。「琉球村」は沖縄の様々な文化にふれる施設で、子どもたちはシーサーの絵付けを体験したり、道ジュネー（沖縄風パレード）に参加して沖縄の文化を体験しました。午後からは、沖縄独特の食べ物が並ぶ公設市場で食文化に触れたり、家族へのお土産や沖縄の記念品を買ったりして最後のひと時を過ごしました。

## 戦争被害から平和の大切さを

事前研修・沖縄研修を通じて、子どもたちは太平洋戦争における長崎の原爆や、沖縄の戦争被害の実態を知ることで、平和を継承することの大切さを感じたと思います。今回参加した子どもたちの平和と友情の翼が大きくはばたいていくことを願っています。

敗残兵と住民が、次々に身を投げた断崖を眺める子どもたち

## 最近のニュースから

### 核燃料の国際管理構想

こんにちイランや北朝鮮が核不拡散条約（NPT）で認められている「原子力の平和利用の権利」を楯にして核兵器を開発しようとしていることなど、核兵器拡散の危険が大きな問題となっています。

**★核燃料を供給するエルバラダイ構想**

その対策の一つとして、国際原子力機関（IAEA）のエルバラダイ事務局長が2003年秋に「核燃料の国際管理構想」を提唱していました。これに呼応する形で米国も同様の構想を持っていることが9月28日のニュースで明らかになりました。

これらの構想とは、核兵器の燃料となるウランをつくったり、原子力発電で使用済みとなった核燃料の中からプルトニウムを取り出す作業（再処理という）を、一定の国が限定して行うようにする一方、この方法に賛成する国には原子力発電用の燃料を供給しようというものです。

**★日本は供給国をめざして参加の方針**

この構想に対して核兵器を持たない国は、「原子力の平和利用」の権利を奪われるのではないかと危惧しています。特に我が国にとっては、青森県六ヶ所村にあるウラン濃縮工場の運転を停止させられたり、2007年に操業を始める予定の再処理工場をスタートできなくなるのではないかと警戒していました。

しかし我が国としては、2010年に六ヶ所村のウラン濃縮工場に新型の遠心分離器が導入されてウラン燃料の生産力が大幅に向上すれば、将来海外への提供もできるようになることなどから、経済産業省資源エネルギー庁は、10月25日に米国の構想に参加する方針を決めました。

**★核保有国の出現を封じる手段となるか**

湾岸戦争のときに明らかになったイラクの核兵器製造計画、インド・パキスタンの核実験実施、「核の闇市場」の存在、そしてこんにちのイランと北朝鮮の核兵器開発疑惑など、世界には常に核兵器を持とうとする動きがみられてきました。

そのような中で「核燃料の国際管理構想」は新たな核保有国の出現を封じるための有効な手段になることが期待されています。しかし、何らかの核施設を持つ40数カ国のうち、どれくらいの国の同意を得られるのかといった課題もあります。そのためには、核保有国の核兵器削減への姿勢も問われなければならないのではないでしょうか。

## 秋月辰一郎先生お別れの会が開催されました

10月20日（木）午前8時55分、呼吸不全のため89歳で亡くなられた初代理事長・秋月辰一郎先生の「お別れの会」が市民有志一同と本協会の主催で、11月27日（日）午後1時から原爆資料館ホールにおいて開かれました。

県地域婦人団体連絡協議会の小池スイさんは追悼の言葉の中で、中央の運動団体の分裂が地方の、それも被爆都市の平和集会まで巻き込む現実を憂えた先生の当時の心情を語り、「小異はそのままに、大同で集まろう」という先生の信念を紹介し、誰もが参加できる長崎独自の運動となった「ながさき平和大集会」を共に立ち上げる苦労を話しました。

13年あまりの間、献身的な看病を続けられた寿賀子婦人らご遺族6人も出席され、代表して長女の藤信子さんがお礼を述べました。

最後に、壇上に掲げられた、白衣姿の先生の遺影に参加者全員が白いカーネーションを次々と手向けご冥福を祈りました。

## 被爆60周年記念 なかにし礼 講演会を開催

毎年行っている当協会主催の講演会ですが、今年は被爆60周年記念の年として、また長崎市内の中小企業を支援している「長崎市勤労者サービスセンター」が、設立15周年を記念した共催事業として開催することになりました。

今回は、作詞家としてレコード大賞や作家として直木賞を受賞するなど活躍中の、なかにし礼さんをお呼びしました。

11月から入場者の募集を行いましたが、1000名を超える会員や市民から応募があり、問い合せも多く寄せられ、なかにし礼さんの人気と知名度の高さがうかがえました。

当日は、連日の寒さにもかかわらず開場前から多くの人が列をなし、入場を今か今かと待つ姿が見られました。

なかにし礼さんのお話は、終戦直後の混乱した社会を生き抜いた経験や作詞家、作家として歩んできた道そして平和や反原爆への思いについて〝その信念を貫く〟ことをキーワードに熱く語られ、被爆60周年記念事業として来場の皆さん方も大変有意義な時間を過ごされたのではないかと思っております。

# 平和案内人第2期生講座修了

平和案内人育成講座は、被爆体験の風化が懸念される中で修学旅行生や地元長崎の人たちに、被爆の実相と平和の尊さを伝え続ける人材を育成しようと昨年度に開始しました。平和案内人1期生のうち56人が今年の4月から、原爆資料館やその周辺の被爆建造物等を案内しています。

10月25日(火)に、「平成17年度平和案内人育成講座」が16回の講座を経て無事終了しました。2期目となる今年度の育成講座は今年の6月中旬にスタート。47人の受講者のうち、12回以上受講した36人に協会の舩山副理事長から修了証書が手渡されました。舩山副理事長は、新聞の「声」の欄に掲載された平和案内人1期生の中小路弥太郎さんの記事にふれながら激励の言葉を述べました。「『話をしても距離を置こうとする子ども達の態度から、知識だけを伝えるのではなく相手に気を配りながら案内することの大切さを改めて知った。平和案内人は誠意が大切』と書かれてありました」と。

この日は「ガイドの心得」について、平和案内人1期生の松田斉氏にもお話いただきました。これからガイドになるにあたっての経験に即したお話を、気を引き締めて聞いていたようです。

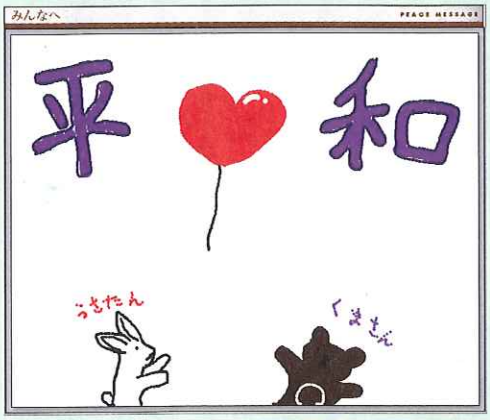
講座を修了した2期生のうち登録した33人は来年1月から1期生とともに平和案内人として活動します。現在はその準備期間として、班ごとに自主研修を行っています。中には、実際のガイドのもようを見学して先輩たちの案内の仕方を学んだり、自主的に碑をめぐって学習したりする人もおり、大変熱心に取りくんでいただいています。

平和案内人の皆様の熱意に十分に応えられるよう、事務局一同なお一層努力してまいります。

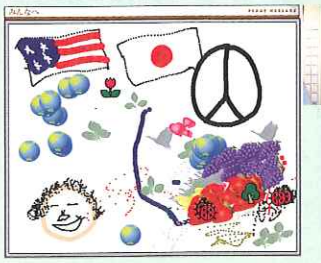
第2期講座の修了式

# 情報コーナー メッセージ

## 平和の灯を世界中にともしていきましょう



広島、長崎に限らず、世界中で核による被害が出ています。これまでの歴史から考えると、今もって核保有国が存在することはとても考えられず、そうあってはならないはずです。原爆の恐ろしさをひとりひとりが知ることから、平和の灯を世界中にともしていきましょう。



←平和がいいにゃ〜

おともだちと、けんかをしたら、かなしくていやなきもちになります。だからおともだちとは、これからもなかよく、あそびたいとおもいます。

# 祈念館だより

## 被爆六十周年 被爆資料・遺影・体験記全国募集 継承―ヒロシマ・ナガサキの記憶

**寄贈問い合わせ先　追悼平和祈念館**
（〒852-8117　長崎市平野町7-8
電話095-814-0055）

被爆60周年である今年8月、鹿児島市山形屋デパートにおいて巡回展『写真と絵でつづるヒロシマ・ナガサキ原爆展』が開催されました。

この巡回展は、広島、長崎の祈念館及び資料館が行う4館共同事業の一環として全国の都市で開催され、ヒロシマ・ナガサキの被爆の実相を市民に伝え、被爆関係資料や遺影、被爆体験記の全国的な収集を図るものです。

来館者の中には、被爆直後の爆心地付近の写真を前に「自分はあの日この場所にいた」と感慨深く当時の様子を思い起こす姿も見受けられました。

被爆60周年を機に、改めて原爆被害を後世に伝えるため、被爆資料、遺影、体験記の寄贈について、皆様のご協力をお願いします。

## 被爆死した英国人捕虜の親族が来館

▲読売新聞西部本社写真提供

福岡俘虜収容所第14分所（長崎市幸町）に収容され、長崎原爆で被爆死した英国空軍ロナルド・ショー伍長の甥、デビッド・ポープ氏夫妻が祈念館を訪れ、遺影と対面を果たしました。

長崎原爆による外国人捕虜犠牲者の遺影登録は今年6月のショー伍長が第一号。「ここに収められてよかった。」とポープ氏は感慨深げでした。

## 「アジア青年平和交流事業」報告会

去る8月に韓国の青年との交流をはじめとして実施した「アジア青年平和交流事業」の報告会を10月29日国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の交流ラウンジを会場に、開催しました。

報告会は、インターネットによるテレビ電話方式の、いわゆるピースネットで行いました。日本人参加者6名はもちろんのこと、釜山国際親善協会のご協力により韓国人参加者5名も釜山から電波を通して話し、本交流事業を通じて、より深まった平和への思いを語り合いました。

日韓をお互いに訪問し、両国の被爆者と交流したことや、長崎原爆資料館、韓国の独立記念館を見学した様子、またその後の心境の変化などについて、それぞれが報告しました。

釜山の文圓奎さんは、「今回の交流のような個人間での交流が盛んになれば、両国に良い関係が築かれるのではないか」と話していました。

継承部会碑巡り班

# 慰霊碑めぐりを開催

師走を間近に控えた11月27日（日）午前10時から正午まで、当協会恒例の「原爆慰霊碑めぐり」を実施しました。当日は夜半から早朝にかけて、季節はずれの嵐のような激しい雷雨が吹き荒れ、開催が危ぶまれましたが、開始時間の午前10時ごろには、薄日が射し出し、事務局もホッと胸を撫で下しました。

## ■立山防空壕跡などに80人参加

当日はここ数年来実施されてきた浦上地区を中心とした慰霊碑めぐりから、場所を長崎駅付近に趣向を変えたこともあってか、事務局の予想を超える約80名の参加がありました。

碑めぐりコースは、長崎駅から本蓮寺、聖福寺、立山防空壕跡等の順で実施されましたが、特に、戦時中の建物疎開により延焼を免れ、築328年で唐寺の趣を強く残している聖福寺や11月3日に新たに整備されオープンしたばかりの立山防空壕跡については、参加者にとっても、単なる原爆に関する史跡めぐりに止まらず、珍しいあるいは新たな観光施設の見学という意味でも興味深いものがあったようです。

## ■碑めぐり班長の説明に聞き入る

原爆史跡前では、主催者である当協会の継承部会碑めぐり班長、室園氏による丁寧かつ熱のこもった説明がなされましたが、参加者一同、氏の説明に当たっての懸命かつ真摯な姿勢に心打たれ、真剣に聞き入っている様子でした。

今回は、原爆イコール浦上というイメージを変えてみようという趣向により、長崎駅付近で実施されたものですが、現実に、原爆史跡は浦上地区を中心としながらも、市内全域に点在しており、そのことは、まさに市内全域にわたっている原爆の脅威の証明でしかありません。参加者の皆さんも、広範囲にわたる原爆の威力を改めて感じたようでした。

奇しくも、本日の碑めぐりが、当協会の創設者であり、長崎における平和運動の第一人者であられた秋月辰一郎先生のお別れ会の日に行われたことは、「原爆慰霊碑めぐり」を核兵器廃絶を目指す平和活動の一環として位置づけている当協会にとって、秋月先生から無言の励ましを受けているように感じた1日でした。

# 「長崎ピースラリー2005」から

## ＝折り鶴と寄附金の寄贈＝

県内のバイク愛好家でつくる長崎ピースラリー実行委員会による「長崎ピースラリー2005」のイベント開催に際して、全国から集められた千羽鶴二万羽と収益金三万円が当協会に寄付されました。

当協会への寄付は今回が六回目となります。例年長崎ならではの企画がなされ、「被爆者による体験講話」「原爆写真パネル展」、また、各地のバイカーによりラリーされた「折り鶴の展示」などが実施されました。

毎年、九州各県はもとより、遠くは関東方面からもバイク愛好家が集まり、二日間で百十名の参加があったということです。また、障害をもちながら参加する人のためには手話通訳者が配置されるなど、人に優しい配慮もなされています。

実行委員会に携わるメンバーは仕事をしながらこのイベントを継続されており、そのご労苦に対し、当協会としても敬意を表しているところです。

# ご寄附ありがとうございました

**8月から11月現在までの寄附者です。**

・佐賀教区教務所（三万三千七百二十八円）
・乙坂　昭（千七百十円）
・川原　竹一（三千円）
・国会職員組合連合会（三万千円）
・置鮎　恵子（二万円）
・長崎ピースラリー実行委員会（三万円）
・堀派神崎流弥生会（三万六千三百六十五円）

（敬称略）

# 会員数報告

| | |
|---|---|
| 維持会員 | 1、359名 |
| 賛助会員 | 161名 |
| 臨時会員 | 12名 |
| 学生会員 | 7名 |
| 合計 | 1、539名 |

平成17年11月30日現在

本紙は再生紙を使用しています。
平成十七年十二月二十日発行
印刷　株式会社　インテックス